

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』における〈記憶〉の発見 — 〈街〉から〈世界の終り〉へ —

王 静

はじめに

村上春樹の中編小説「街と、その不確かな壁」は、村上が掲載したことを「とても後悔した」と明言した、単行本や全集に収録されていない唯一の作品である。だが、この作品を書き直すという意図で5年後に長編小説『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』（以下『世界の終り』と略す）が創作された。『世界の終り』における異世界である〈世界の終り〉は、「街と、その不確かな壁」で描かれた異世界の〈街〉（以下〈世界の終り〉と〈街〉という表記で両作品における異世界の空間を指す）をベースにして成り立っている。両作品において、同じように異世界が物語られているが、単に繰り返されるのではなく、加筆修正が施されている。両作品の間の最も顕著な違いは、結末の設定である。「街と、その不確かな壁」においては「僕」が〈街〉を脱出することを選ぶのに対して、『世界の終り』における「僕」は、街に留まることを選ぶ。従来の研究では、この点に注目する論考が多く、その評価には賛否両論がある。

肯定的な論として横尾和博のものがある。横尾は「「心」のない「生」を否定し、「乖離した「心」と「生」を再び結ぶ道を希求している」と「僕」が異世界に留まることを評価する。異世界に残ることによって、「他者とのコミュニケーションを自分で選び取り、責任を引き受ける」と「僕」のコミットする姿勢を評価する関谷真広の論も横尾の論の延長線上にある。一方、否定的な論として次のようなものがある。加藤典洋は異世界に残るのは「中途半端な道」だと指摘し、松田和夫は、その結末が読者に提供したのは「厳密な認識ではなくふわふわとした気分である」と批判しているのである。

以上の論をまとめると、肯定的な論は、主人公が能動的に行動していくという変容に着目しており、一方の否定的な論は、主人公が変容したとしても追求した理想的世界のビジョンが明らかではないということの問題視している。いずれも相応に

説得力があるが、主人公の変容という結果に重点をおくのが従来の研究の特徴であり、変容の原因が棚上げされていることは否めない。言い換えれば、いかにして「乖離した「心」と「生」を再び結ぶ」ことができたのか、いかにして他者とコミットできるようになったのかは、不明瞭なのである。それらの問題を明らかにすれば、『世界の終り』の書き直しの意義を考え直すことができるのではないだろうか。

本稿では、『世界の終り』における〈世界の終り〉と「街と、その不確かな壁」の〈街〉を比較した上で、結末にいたるまでの進行過程に目をむけ、結末を逆転させる根本的な要因にアプローチする。その結果を踏まえて、「街と、その不確かな壁」の限界を検討し、『世界の終り』の再評価を試みる。

1. アンチユートピア像の浮上と変容する「影」

「街と、その不確かな壁」と『世界の終り』における二つの異世界の相違を把握するために、まず手短かに共通点を確認しておきたい。二つの異世界を支える共通したルールは、影を切り離すことである。影の意味について、「街と、その不確かな壁」では、門番が「影ってのはつまりは弱くて暗い心」であると言っており、影の喪失についても、「憎しみ、悩み、弱さ、虚栄心、自己憐憫、^(註6)怒り」がないことであると語っている。影を切り離すルール、および影の持つネガティブな意味は、『世界の終り』にも受け継がれている。

影がないからこそ、〈街〉と〈世界の終り〉は、ユートピアとして成り立つ。「街と、その不確かな壁」において、「暗い心」のない住人が壁に囲まれ、平穏な日々を送るというユートピアが表現されている。さらに、〈世界の終り〉においては、住民たちは「傷つけあわないし、争わない」、「みんな自分の労働を楽しんでいる」、「年老いることもなく、死の予感に怯えることもない」と多方面から^(註7)住民たちの満足感が描かれ、異世界のユートピア的な側面がより濃厚に打ち出される。描写の濃淡の差こそあるが、異世界のユートピア的な側面を構築しようとする作者の意図は両作に共通している。

さらに、主人公が影の全体像を徐々に把握するにつれて、異世界の裏にあるアンチユートピアの像が浮上してくるという点も同様だ。「街と、その不確かな壁」において、影は「暗い心」であることが門番によって伝えられる。だが、「僕」は夢読みを通して、影が彼女への想いに繋がるものであることを発見し、影を切り離さ

れた自分が本当の自分ではないことに気づく。したがって、影とともに〈街〉を脱出するという結末に至るのである。影についての認識から、ユートピアがアンチユートピアへと変容する異世界の仕組みは、『世界の終り』で反復されている。『世界の終り』において、「戦いや憎しみや欲望がないということ」は、その逆のものとしての「喜び」、「至福」、「愛情」がないことを意味し、「心のない人間はただの歩く幻にすぎない」（『世』下219-220頁）のだということ、「僕」の影は「僕」に意識させる。

上述したように、影を切り離すというルールを原点に、影の持つ二面性の発見が異世界の二面性の発見を導き出すという展開は、両作品に共通するところである。両作共に異世界のアンチユートピア性に気づくのだが、冒頭で確認したように、「街と、その不確かな壁」の主人公が〈街〉を脱出するのに対して、『世界の終り』の主人公は〈世界の終り〉に残ることを選ぶ。この点について、従来の研究では、本稿の冒頭で触れた肯定的な論に見られるように、自分の「希求」、自分による「選択」という「僕」の主体性の獲得が強調されてきた。しかし、突如として「僕」の主体性が獲得されるわけではないだろう。その過程、「僕」が異世界に残ることを選ぶという結末に至るプロセスは、十分に検討されていないのである。以下では、二つの異世界の根本的な相違に焦点をあて、逆転した結末に至る理由を明らかにしてみたい。

〈街〉と〈世界の終り〉の相違点としては、「森」という新しい空間の設定や結末など、表層的な相違だけが注目されてきた。^(注B) 両作品における影というメタファーは同一視され、決定的な違いは見落とされている。^(注9) 二つの世界を支える影の意味の変容こそが、二つの世界が根本的に異なっている点だと本稿は主張する。『世界の終り』に埋め込まれた影の新たな意味が、異世界を再構成し、結末に深く関与することを論じよう。

上述したように、「街と、その不確かな壁」において、影は「暗い心」であると門番によって語られる。一方で、「僕」は、影には彼女への愛も含まれていることに気づく。つまり、影はポジティブな感情もネガティブな感情も含む心の総体なのである。〈街〉の外の人間は、影を背負いつつ心を持っているが、〈街〉における影の切り離された人間は、影が死ぬと心を失い、空っぽな存在になる。つまり「影の喪失=心の喪失」であり、「影=心」という図式によって、「街と、その不確かな

壁」における影と心の関係は把握できるのである。

一方で、『世界の終り』の中の影と心の関係は、このような簡単な図式では把握できない。「僕」の影は異世界の原理を次のように説明する。

「この街の完全さは心を失くすことで成立しているんだ。(中略)まず影という自我の母体をひきはがし、それが死んでしまうのを待つんだ。影が死んでしまえばあとはもうたいした問題はない。日々生じるささやかな心の泡のようなものをかいたしてしまっただけでいいのさ」(『世』下219頁)

「心は獣によって壁の外に運び出されるんだ。それがかいたすということばの意味さ。獣は人々の心を吸収し回収し、それを外の世界に持って行ってしまふ。そして冬が来るとそんな自我を体の中に貯め込んだまま死んでいくんだ。彼らを殺すのは冬の寒さでもなく食料の不足でもない。彼らを殺すのは街が押し付けた自我の重みなんだ。」(中略)「獣が死ぬと門番がその頭骨を切り離す」と影はつつけた。「その頭骨の中にはしっかりと自我が刻み込まれているからだ。頭骨は綺麗に処理され、一年間地中に埋められてその力を静められてから図書館の書庫にはこぼれ、夢読みの手によって大気の中に放出されるんだ。夢読みというのは——つまり君のことだな——まだ影の死んでいない新しく街に入った人間が就く役目なんだ。夢読みに読まれた自我は大気に吸いこまれ、どこかに消えていく。それがつまり〈古い夢〉だ。(『世』下222頁)

影が語ったように、影が死んだとしても、「ささやかな心の泡のようなもの」が「日々生じ」、その「ささやかな心」は、「獣の吸収——門番の処理——夢読みの放出」という一連の作業によって、無くされてしまうのである。「心の泡のようなもの」とはいったい何だろうか、何故「日々生じる」のか、といった問いが浮かんでくる。次の影と記憶の関係の考察を通してその意味が明らかにしよう。

両作に登場する人物の記憶を並べて対照してみれば、『世界の終り』の影・心の関係には、〈記憶〉という新たな要素が導入されていることを見出すことができる。まず、「街と、その不確かな壁」に登場する主な人物の記憶を見よう。「僕」は〈街〉の外で知り合った彼女のことを覚えている。また彼女に〈街〉の外の話を語ったことから、「僕」は〈街〉の外の様子をも覚えているのが分かる。そして、〈街〉の住民である大佐という人物は、影を失う前に愛する人についてのエピソードを「僕」に語る(「街」69-71頁)。「僕」と大佐は、いずれも影が切り離される前の記憶を

持っている。つまり、「僕」と大佐の影の喪失は、彼らの記憶には影響を及ぼさないのである。一方、彼女は影が切り捨てられたことで〈街〉の外の「僕」のことを覚えていないと設定され、このことは影の喪失が記憶の喪失を招くことを示唆している。以上を鑑みれば、「街と、その不確かな壁」においては、影の喪失と記憶の関係が問題にされておらず、〈街〉にいる人々の記憶の表象が混乱していることが分かる。

それでは、『世界の終り』においてはどうか。「僕」は彼女を覚えていないという設定であり、「僕」が街の外を語る場面も、大佐による愛のエピソードも削除されている。影を持っている時期の記憶、すなわち影が関与する記憶は、用心深く捨棄されている。つまり、『世界の終り』において影の喪失は、影が負担する記憶の喪失を意味するようになっていたのである。また、記憶と心の関係は、大佐の語りからも見出される。

「あるいは君にはこの街のなりたちのいくつかのものが不自然に映るかもしれん。しかし我々にとってはこれが自然のことなのだ。(中略)硝煙や血の臭いや銃剣のきらめきや突撃のラップとか(ニッパとか)のことは今でもときどき思いだす。しかし私は我々をその、戦いに駆りたてたもの(を)をもう思い出すことはできんのだ。名誉や愛国心や闘争心や憎しみや、そういうものをね。君は今、心というものを失うことに怯えておるかしらん。私だって怯えた。それは何も恥ずかしいことではない」大佐はそこで言葉を切って、しばらく言葉を探し求めるように宙を見つめていた。「しかし心を捨てれば安らぎがやってくる。これまでに君が味わったことのないほどの深い安らぎだ。そのことだけは忘れんようにしなさい」(『世』下188頁)

大佐の言う心の安らぎは、心を捨てることを前提にしている。また、心を捨てるということは、「硝煙や血の臭いや銃剣のきらめきや突撃のラップ」、「名誉や愛国心や闘争心や憎しみ」などを忘却することを意味する。つまり心の喪失は記憶の喪失と同じ意味で語られているのである。このことから、『世界の終り』における心と記憶は、同じ意味の言葉として考えて差し支えないだろう。立ち戻って「日々生じるささやかな心の泡のようなもの」の意味を考えると、それは日々の体験によって生じる記憶であると理解できよう。

以上、両作品における影の相違を検討してきた。「街と、その不確かな壁」にお

いては、「影の喪失＝心の喪失」という図式で影の意味が捉えられ、影の喪失は完全な心の喪失を意味するが、影と記憶の関係は不明瞭である。一方の『世界の終り』では、心と記憶は区別されずに用いられている。つまり、影・心・記憶の関係性は、「影の喪失＝影が負担する心(記憶)の喪失」ということになる。上述したような記憶に関わる書き直しから見れば、影・心・記憶の関係性は、『世界の終り』において徹底されたことが分かる。先に結論を言っておけば、この新しい関係性こそ『世界の終り』と「街と、その不確かな壁」との間の根本的な差異である。影・心・記憶の関係性は、物語の展開にどのような影響を与えたのか、それは結末とどう関わるのか。以下では、この新しい関係性を出発点に『世界の終り』の書き直しの全貌を把握し、「街と、その不確かな壁」の限界の検討と『世界の終り』の再評価を試みる。

2. 記憶の発見による連鎖反応

「影の喪失＝影が負担する心(記憶)の喪失」という影・心・記憶の新たな関係性を手がかりとして、改めて『世界の終り』の物語の筋書きをたどっていくと、記憶による連鎖を読み取ることができる。第1節で論じたように、「街と、その不確かな壁」における、影の喪失が心の喪失をもたらすという明瞭な図式に対して、『世界の終り』においては、影の喪失に付随し大方の心(記憶)を喪失しながらも、日々の体験によってごく僅かな心(記憶)が生じる。またそれらの心(記憶)は「獣の吸収——門番の処理——夢読みの放出」という作業によって失われるのである。複雑化されたその心の喪失のプロセスは、一連のファクターの関係を変容させる。

「街と、その不確かな壁」では、獣は犠牲者であると語られるが、何による犠牲なのかは不明であり、獣と影の関係は見られない。また、「古い夢」は材質が不明な「卵型」のものであり、「古い夢」と獣とは関係を持っていない。「古い夢」には集会的記憶が蓄積されているように示唆されているが、影と記憶の関係は不明瞭であるため、「古い夢」と影との関係も見られない。要するに、「古い夢」、獣、影それぞれのファクターは、ばらばらのまま展開し、静的なファクターの集合体に留まるのである。

一方の『世界の終り』においては、影・心・記憶の関係性により生まれた心を失う複雑なプロセスが、それぞれのファクターに新たな意味をもたらす。「古い夢」

が処理された獣の頭骨と設定されたことで、獣と「古い夢」は繋がる。また、獣は影が負担しなかった心を吸収し、壁の外に運び出す役割を担うため、獣と影も結ばれている。このように、獣、「古い夢」、影は、連続的なファクターの運動体になる。このように見ていけば「街と、その不確かな壁」が村上によって封印された一因は、ファクター同士の関係の稀薄さに問題があったためといえよう。『世界の終り』における影・心・記憶の新たな関係性の導入によって各ファクターが繋がってきたのである。

影・心・記憶の新たな関係性が、上述した各ファクターに新たな関係性を与えただけではなく、記憶の発動によってさらに一連のストーリーの変容が引き起こされた。「街と、その不確かな壁」では、住人が心を持っていないのが〈街〉の実態であるが、〈世界の終り〉では、住人は心のない存在になるのが理想的な状態とされるが、僅かとはいえ、心(記憶)が日々生じているのがその実態である。

『世界の終り』の主人公は、その僅かな心の存在をみごとに捉えた。音楽のない街において、「僕」は、見つけた使い道のない手風琴をもって、影とともに生きる世界、つまり「ハードボイルド・ワンダーランド」の世界で馴染んだ曲「ダニー・ボーイ」のメロディーを思い出し、「今・ここ」の時空間を乗り越える。また「手風琴は唄に結びついて、唄は私の母に結びついて、私の母は私の心のきれはしに結びついている」(『世』下253頁)と彼女が語ったように、音楽の想起によって、彼女の記憶も喚起されて、心がよみがえる。このように、「僕」は記憶の想起を通して心を失う異世界の呪いを破る。そのことによって〈世界の終り〉を大きく揺さぶり、そのシステムに対立する存在になるのである。

「僕」は〈世界の終り〉に残るのか、それとも影と一緒に脱出するのか。〈世界の終り〉のシステムが崩壊しないかぎり、そこに残ることは結局心が完全に失われることにほかならない。しかし外に脱出したとすれば、不自然な展開になるに違いない。というのも、彼女の心が蘇る希望を見つけたのにもかかわらず、心のある僕が彼女を放置してしまうことになるからである。入れ子構造のように、〈世界の終り〉の中には、もう一つの空間「森」が登場し、この問題を解決する。「有効に影を殺しきれなかった人々」(『世』下221頁)つまり、心(記憶)を持っている人々の居場所として「森」が設けられる。「僕」は、「森」に追放されることを覚悟しつつ、彼女と一緒に異世界に残ることを選ぶ。以上の進展から見れば、『世界の終り』の

結末は合理的かつ必然的だと思われる。また、「森」の中で心のもつ人間がどのような生活を送っているかについては、具体的には描かれず、ただ「様々な思いを抱いたまま永遠に森をさまよう」(『世』下221頁)と「森」の外部の存在によって想像されるのみである。確かに加藤典洋が指摘したように、『世界の終り』は新しい世界のビジョンを提示していない。だが、封じられた異世界のシステムを開く力を提示してくれたのではないだろうか。

上述した一連の連鎖を遡ってみると、その力の存在が浮かび上がってくる。登場人物の記憶についての書き直しや、音楽や「森」など新たな要素の導入は、いずれも、影・心・記憶の新たな関係を軸に展開してきた。記憶が残る可能性が設定され、音楽の導入が記憶を喚起する条件を備える。さらには記憶のある人の居場所として「森」が設定されたと読解できるのではないだろうか。この一連の連鎖を駆動させる力は、記憶にほかならない。これこそが、〈世界の終り〉の「僕」の主体性を支える内的な力であり、閉じこめられているアンチユートピアを打開する力であろう。

3. 個人の再生に繋がる記憶のメカニズム

『世界の終り』についての先行研究には、記憶に触れる論もあるが^(註10)、それらの中では、一体記憶について何が問題となっているのか、記憶と個人の再生がなぜつながっているのかは明らかにされていない。『世界の終り』の中のもう一つの世界「ハードボイルド・ワンダーランド」のストーリーを手掛かりにし、それらの問いを解き明かしてみたい。

「ハードボイルド・ワンダーランド」においては、主人公は「組織」と呼ばれる組織に属する計算士であり、脳手術によって瞬間的に安定させた「意識の核」を利用し、機密データを暗号処理するための「シャフリング」作業を行う。しかし、〈世界の終り〉と名づけられた主人公自身の「意識の核」の内容は彼には教えられていない。その理由について、「組織」の人間は以下のように述べる。

「要するに」と彼らはつづけた。「我々は君のパス・ドラマを永遠に君自身の意識の表層的な揺り動かしかから保護しておかなくてはならんのだ。もし我々が君に〈世界の終り〉とはこうこうこういうものだと言ったと内容を教えてしまったとすると、つまり西瓜の皮をむいてやるようなものだ。そうすると君は間違いなくそれをいじりまわして改変してしまうだろう。ここはこうした方が良くか、

ここにこれをつけ加えようとしたりするんだ。そしてそんなことをしてしまえば、そのパス・ドラマとしての普遍性はあつという間に消滅して、シャフリングが成立しなくなってしまう」(『世』上191-192頁)

「意識の核」の安定性は、「シャフリング」が成立する前提であるため、「意識の表層的な揺り動かしから保護」するために、「意識の核」と「意識の表層」は、西瓜の果肉と皮のように、常に分離されなければならない。主人公の意思によって「意識の表層」(西瓜の皮)は変えることができるかもしれないが、自分の「意識の核」(西瓜の果肉)には到達できないと主張されているのである。

「意識の表層的な揺り動かし」、つまり「意識の表層」が変化することの意味は、主人公に脳手術を行った老博士の説明を参照してみれば分かる。老博士は「シャフリング」を実現するために、「新たな体験の増加に伴うブラックボックス(無意識一筆者注)の変化」(『世』下82頁)という問題を解決しなければならないと語る。その変化は、具体的には「人は生きていく限りなんらかの体験をするわけだし、その体験が一分一秒ごとに体内に蓄積していく」(『世』下82頁)ことを指す。「組織」のいう「意識の表層」の変化は、日々生じて無意識の一部分になっていく個人の「体験」だと思われる。

この「意識の表層的な揺り動かし」は〈世界の終り〉の「日々生じるささやかな心の泡」を連想させる。影が切り離されれば、「日々生じるささやかな心の泡」は問題ではないとする〈世界の終り〉のルールは、「意識の核」を固定させることができれば、「意識の表層」の変化はただ「皮にしるしをつける」(『世』上191頁)ことに過ぎないと主張する「組織」の理念に共通している。言い換えれば、「ハードボイルド・ワンダーランド」における、無意識を「意識の核」と「意識の表層」とに分ける二分法は、〈世界の終り〉における、心を影が負担する心(記憶)と「日々生じるささやかな心の泡」とに分ける二分法と通底しているのである。

こうしてみれば、「ハードボイルド・ワンダーランド」と「世界の終り」という二つの『世界の終り』の物語の根幹を支えるのは、無意識の構造の問題であると言える。言い換えれば、それは記憶のメカニズムの問題である。表層的な体験は深層の記憶の集積場に何の影響も与えないのか。あるいは、表層的な体験は深層的な記憶の集積場と連動し深層の変化をもたらすことができるのか。「組織」と〈世界の終り〉のシステムは、明らかに前者を主張する。一方、第2節で論じたように、〈世

界の終り〉で主人公の「僕」は手風琴に会うという体験を生かして、「僕」と彼女の心を蘇らせる。つまり「意識の表層」の変化を利用して、「意識の核」を再構成しようとするのである。異世界を攪乱した「僕」は、明らかに後者のような記憶論の代弁者である。

表層的な体験が深層の記憶の集積場に影響を与えないという「組織」と〈世界の終り〉のシステム側の理念は、記憶を脳のうちに保存されているデータのような固定的な痕跡と見なす記憶の局在説と通底している。深層の記憶は刻印の集積のごとき日々の体験とは繋がっていないというものだ。しかし一方で、生成的な記憶論がある。代表的なものとして生命哲学者ベルクソンの記憶論が挙げられる。ベルクソンは、記憶を運動として捉え、記憶の総体を逆さ円錐に喩える。

総体的な記憶は現在の状況の呼びかけに対し、二つの同時的運動によって応える。ひとつは移行(translation)であって、これによって記憶はその全体が経験の前面へと移動し、そうすることで、多かれ少なかれ、分割されることはないが行為することを目指して凝縮する。もうひとつは自分自身の回転(rotation)であり、これによってそのときの状況へと向かい、それに対して最も有用な面を差し出すのである。^(註11)

円錐の底面と頂点との間における絶え間ない「移行」と「回転」こそは、運動している記憶の有様である。現在の体験にしたがって、記憶総体はその都度変化しながら現在という一点に現出していくのである。〈世界の終り〉においては、主人公の現在の体験が記憶を喚起させている。さらに主人公の再生をもたらすプロセスは、まさに現在の一点と記憶の総体が互いに浸透する記憶の動的メカニズムであると言えよう。記憶の喚起による「僕」と彼女の再生は、「意識の表層」と「意識の核」の相互の境界を破り、固定的な記憶のイメージを崩壊させる。

記憶の想起による個人の再生というテーマは、形を変えつつも、『世界の終り』の後の村上作品からも読み取れる。『アフターダーク』(2004)においては、姉との間の強い絆の想起によって親密な関係を追体験することを契機とし、マリは熟睡した姉エリの意識を取り戻したのである。『アフターダーク』は記憶の力に頼り、他人を再生させる物語として読解できる。また、『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』(2013)においては、多崎つくるとは、絶縁された旧友と再び向かい合うことで記憶を再編成したことを契機に、旧友に捨てられたというトラウマを超え、新

たな人生を生き始める。つまり、記憶の再編による個人の再生の物語である。これらの作品においては、記憶は一貫して動的・進行的なものであり、現在ないし未来に強く影響を与え、物語を推進する根幹としての役割を果たしてきたのである。

おわりに

本稿の目的をここで改めて確認する。本稿は、「街と、その不確かな壁」と『世界の終り』における二つの異世界を比較検証した上で、結末までの経緯を考察しつつ、「街と、その不確かな壁」の限界を検討し、『世界の終り』を再評価することを目指した。

「街と、その不確かな壁」と『世界の終り』の根本的な差異は、影の意味の相違である。『世界の終り』には、影・心・記憶という新たな関係が導入されている。その関係性により、ばらばらであったファクターが連動しただけではなく、記憶(心)が残る可能性が生じ、記憶(心)が喚起され、主人公は主体性を獲得する。さらに、『世界の終り』における記憶への考察を通して、記憶に関する作家の問題意識を読み取ることができる。記憶総体を固定的な蓄積と見なす「組織」と〈世界の終り〉のシステムに抗して、記憶による個人の再生が描かれることで、記憶総体と現在とが連動している記憶のメカニズムを提示したのである。このような動的な記憶の有様が『世界の終り』の後の作品にも繰り返されていることからすれば、「街と、その不確かな壁」の書き直しとしての『世界の終り』の意義は、記憶の動的なメカニズムの発見にあると思われる。

「街と、その不確かな壁」がユートピアのアンチユートピア性を露わにする物語であるとすれば、『世界の終り』は、ユートピアのアンチユートピア性を発見しつつ、記憶のメカニズムの再認識を通して、アンチユートピアの中で生き延びる道を探求する物語だといえよう。

注

- (1) 〔特別インタビュー〕『物語』のための冒険(『文学界』1985年8月)。
- (2) 横尾和博『村上春樹の二元的世界』(1992年、鳥影社)。
- (3) 関谷真広『『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』論——壁を通り抜けるコミットメント——』(『近代文学第二次研究と資料』3、2009年3月)。
- (4) 加藤典洋『村上春樹イエローページ1』(2006年、幻冬舎文庫)。

- (5) 松田和夫「消滅と打開:村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』について」(『桜文論叢』81、2011年12月)。
- (6) 60頁。「街と、その不確かな壁」の本文引用は「街と、その不確かな壁」(『文学界』1980年9月)による。以下引用する際、「街」という略号を用い、頁数のみを示す。
- (7) 下218頁。『世界の終り』の本文引用は『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』上下(1988年、新潮文庫、新潮社)による。以下引用する際、『世』という略号を用い、頁数のみを示す。
- (8) 横尾和博『村上春樹の二元的世界』(1992年、鳥影社)は、両作品の相違点として影に注目したが、影の意味ではなく、「僕」と影の関係の変容を挙げている。その後の論考である山根由美恵「封印されたテキスト—村上春樹「街と、その不確かな壁」にみる物語観—」(『近代文学試論』2006年12月)は、両作品の間の六つの相違点を指摘しているが、影の意味の変容には言及していない。
- (9) 例えば、肖珊「村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』論」(『山口国文』27、2004年)では、『世界の終り』というユートピアは心=影の喪失をもとにして築かれている」と述べ、「影=心」という図式で『世界の終り』における影の意味を読解し、「街と、その不確かな壁」の中の影と同一視している。
- (10) 浅利文子の「自己回復へ向かう身体:世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」(『法政大学大学院紀要』68、2012年)は、記憶の喚起に触れたが、記憶のメカニズムを問題としておらず、身体の変化による主人公の回復を論じている。清真人の『村上春樹の哲学ワールド』(2011年、はかる書房)は『世界の終り』における記憶に焦点を当てているが、芯となる記憶の回復による記憶の全体性の回復をめぐる論であり、記憶総体の構造は射程の外に置かれている。
- (11) ジャン=ルイ・ヴィエイヤール=バロン『ベルクソン』上村博訳(1993年、白水社)。

【付記】

本稿は、平成25年度名古屋大学国語国文学秋季大会における口頭発表「村上春樹のユートピア表象——異世界での旅に着目して」をもとに作成しました。発表の席上、ご教示を賜りました方々に深く御礼申し上げます。

(おう・せい／名古屋大学大学院博士後期課程)